

【入選】

ヤドリマキ

経済学部 経済学科4年 三浦 庸平

最初は呼びかけに反応しなくなった。次には体が冷たくなった。瞼は開いたまま放置され、くすんだ瞳の奥には、もう何もない。

その体からは奴らがうごうごと湧いて出る。はらわたをむさぼり、皮膚を食い破り、人の生きた証をきれいに奪い去ってゆく。皮膚を剥がす。肉をちぎる。骨をかじる。

暖かくて、豊かだったものが、いつのまにか何者でもない塊になってゆく。

暗闇の中、ランプの光に照らされた母だったものを、エラはじっと見つめていた。

もう三日は何も食べていない。体は痺れ、舌は乾き切っていた。気が遠くなる中で、苦しさも悲しさも奪われてしまったからか、目の前で起きていることを無感動に見つめ続ける。

奴らは細い足で地面を掻きながら、腹を引きずって餌の上を闊歩している。二本の鉄のような手で肉を解体し、口元へと運ぶ。

最初は指先よりも小さかったのに、今では拳よりも大きくなっている。

指が骨ごと碎かれてちぎれると、奴らはそれを奪い合うように追いかける。追いつけなかった者

は赤い泡を口からこぼして、はらわたの中へと潜ってゆく。

エラはばらばらになってゆく母の手を見ながら、思い出の中に生きていた温もりが壊されてゆくのを感じた。

生まれてからずっと、ここで母と二人で暮らして続いていた。エラにとっては母が世界の全てだったからこそ、彼女はこの光景を実感することも理解することもできない。ただ、エラは自分がずっとと手繰り寄せていた糸が切れてしまったことだけは感じていた。その糸の先に繋がっていたものに、もう手が届かないことも。

エラは途切れそうな意識のなかで、次第に小さくなってゆく母に手を伸ばす。ぼやけた視線が指し示すのは、最後の一欠片に群がる奴らの塊だった。何を期待しての行動だったのか、それとも何かに追い立てられての逃走だったのか、それすらわかる必要もなしに意志は熱量を向けて虚空を掴んだ。

奴らが八方に散ってゆく。原点から興味を失ったように。そして暗い部屋の隅に隠れていた。奴らが群がっていたはずの場所にははっきりと

空間が残って、確かにあったはずの面影は忽然と、そこには何も在りはしなかった。

「おい！ 子供が倒れてるぞ」

背後で声が聞こえた。エラは母親以外の人を見たことがないから、その声がどこから聞こえたかも、それが自分を指していることもわからなかった。

「ランタはどこだ？」

「ここにはいない。他の部屋は」

「もうここが最後だよ」

ランタは母の名前だった。それを聞いてさっきまでの悪夢のような光景を思い出すと、エラは枯れた息をえすいた。

「子供が先だ。大丈夫か？ お嬢ちゃん」

エラは返事をしようとするが、体が痺れて何もできない。

「待て。ヤドリマキだ」

「……そうか。ランタは亡くなったか。次の巫女を決めなければな」

「まだランタだと決まったわけじゃ。とにかく『彼女』を逃さないように」

男たちはよくわからないことを言った。

「ああ」

声の主に体が持ち上げられる。運ばれて、今まで見たことのない場所へと。

景色が変わる。暗闇が明転する。薄れかかっていた意識が、それを見逃すまいと瞳に焼き付ける。エラはこの部屋から一度も出たことがなかったからこそ、この記憶を忘れない。

ランプよりも明るくて、何秒走っても届かないほど壁が遠くて、母とエラ以外にも人がいる。

この日、エラの世界が変わった。

「大丈夫か？ 意識はあるよな。ほら、水だ」

男はエラを寝かせると、コップを差し出した。母とは違ったたくましい腕が目に入る。母と自分以外の人間。水に口をつけると、次第に体の奥から痺れが取れてくる。

「その子は？」 瘦せた男が話しかけた。

「ランタの家に倒れていた。脱水症状を起こしてる」

「娘か？ 確かランタの子供は死んだって聞いてたが」

「わからん。だがこの子がランタにとつて大事だったってのは様子を見てわかったよ」

瘦せた男が家の方を見て眉を顰めた。

「おい……あれ。ランタは死んだのか？」

「十中八九そうだろう。まあ、誰であろうが。この子の身寄りだ」

「腹が減ってるなら丁度いいな……つとすまねえ。不謹慎だった」

エラは水を飲んで少し意識がはつきりしたが、

やはり男たちが何を言っているのかわからなかった。

「……お、かあさん、は……？」

あの光景は夢だったのだろうか。エラは母の名を口にする男に尋ねた。

「意識がすっかりしてきたか。良かった。君のお母さんの名前はランタだよな？」

エラが頷くと、男は少しだけ目を陰らせ、そして彼女に視線を戻して微笑んだ。エラがその表情の意味を知る間も無く、その背後にエラの家から出て来た人たちが集まった。

「終わりました。部屋の隅に六匹、これで全部だと思えます」

彼らは奴らを掴んでいた。人の頭くらいの塊が六つ、空を切る足でじたばたともがきながら赤い泡を吹いている。

エラは恐怖で息を呑み、動けなくなった。

「ありがとう。どうやらランタで間違いないようだ。身寄りはこの子だけのようだから、今この場で葬儀をする」

「わかりました。二匹くらい解体して……子供に殻は早いですよね」

彼らが奴らをひねると、柔らかい腹と硬い脚がちぎれて、赤い液体が滴った。それを大切そうに器に注いで、残った部位も丁寧に解体してゆく。

「君は誰かの葬儀に出たことはあるか？」

悪夢の続きのような光景を背後に、エラは首を左右に振った。

「そうか。今から君は、お母さんから抜け出たヤ

ドリマキを食べるんだ」

△

死んだ人間からは、ヤドリマキが出てくる。

ヤドリマキには死んだ者の魂が宿っていて、抜け殻になった自分の体を食べて大きくなる。

……そして、私たちはヤドリマキを食べて生きている。

私は草原の隅で寝転がって、空の天面を見上げていた。

三本の支柱に支えられた太陽が、今日も変わらずに煌々と世界を照らしている。天面にはいくつかの建造物があって、まるで街を見下ろすような景観が広がっている。

その中でも私は、一本だけ目立つ塔が好きだった。逆さまの塔。

大昔、まだあそこで人々が暮らしていたころ、彼らは発達した技術で天を掴もうとしてあの塔を作った。それが神の怒りに触れて、世界は天地が逆さまになってしまったというのだ。たくさんの人が死んで、たくさんのが失われた。それ以来、私たちは技術を捨て、自然と共に生きるようになった。

馬鹿馬鹿しいおとぎ話だ。神なんていう在ることも無いとも言えないものに原因を転嫁して、誰も確認できないまま説明したつもりになっている噂話。誰がどうして言い出したかなんてわからずと

も、皆が知っていればそれで真実みたいになつてゆく。そんな、くだらないもの。

それでも、私はその塔に……今とは違った時代に憧れを持っている。

私たちはこの世界を『箱』と呼ぶ。私たちの過ごす地面、空の上に広がる天面、そして四方に均等に広がる無機質な壁面。綺麗な立方体の中心に、各面の中央から伸びる柱によって串刺された太陽が鎮座する完全に閉鎖された空間。

箱の中には人類と、その共生関係にあるヤドリマキだけが生きている。

私たちは草を溶かし編んで服を作り、土をこねて家を作り、ヤドリマキを捕まえて食べている。私たちの亡骸から生まれ、それを食べるあのヤドリマキを。誰もがそうして、生きている。

しかし、私はそうでない生活をしていたのだ。このおぞましく正しい摂理に曝される以前に、あの狭くとも温かな暗闇のなかで呼吸をしていた。その日々が、どうしてもこの世界を受け付けない。私はこの三年間、餓死寸前まで食事を取らずに隠れては、見つかつて、無理矢理ヤドリマキを食べさせられる生活が続いていた。

「エラ！ ここにいたんだ」

私と同じくらいの少年が駆け寄って来た。ここは町からは少し離れているから見つからないと思っていた。

「アタ。どうして分かったの？」

「おばさんが探してたよ。食事の時間をすっばかしてばかりだつて」

「探さなくてもいいのに……それで、なんで？」

アタはくりくりとした目を少し見開いて、したり顔で答える。

「エラは草の背が低い場所に良くいるから」

「……それは……ヤドリマキがあまりいないから」

彼らは内臓の詰まった柔らかい腹をむき出しにしているの、身を隠せる背の高い茂みや柔らかい泥のある沼地を好むのだ。

「知ってる。やっぱりヤドリマキが嫌い？ 僕らの半身なのに」

「半身なんかじゃない！ 奴らは私たちを食べるのよ！？」 お母さんだつて奴らに食われたの。それを、そんなものを食べさせられたのに、どうしてアタもみんなも平然としていられるの！？」

空きつ腹に込み上げて来た胃液が、口の中に酸味を広げて、私はえずきに涙を堪える。

アタは困った顔をしていた。そしてそれはきつと私もなのだろう。違和感を覚えるのは、最初に注がれたものを中心に世界が決まってしまうからだ。彼は私の感情に驚き、そして言葉を探している。

「……大人のみんなは君が虐待されてたつて言うんだ」

「お母さんは虐待なんてしてない！」

「でも、君をずっと暗い部屋に閉じ込めて、食べ物も与えずに餓死寸前に追いやつて」

「違う！ お母さんは食べ物を持って来てくれた。不思議な味がする粘土みたいなものを、死ん

じやう数日前まで毎日持つて来たの！」

「だからそんなものは誰も知らないんだつて！ だからヤドリマキを食べないと、エラは死んじやうんだよ？」

ふと、その言葉の先を想像する。何もない瞳、体は痺れ、意識を失った後。体の内側から痛みが走り、皮膚の裏を奴らが蠢き、そして身体中を食い破つて彼らが生まれ出る。最初は少しずつ啄むように、そしていずれは私をばらばらに解体して永遠の苦しみの中へ連れ去つてゆく。

言葉よりも呻きよりも先に胃の中から込み上げるものが通った。嘔吐。何も食べていないからこそ、胃液だけを搾り出すような締め付ける苦しさが喉を掴んだ。

「エラ！？ ごめん！ そんなつもりじゃ……」

アタはあたふたと慌てながら、私の背中を撫でる。母と同じ温かい手だった。

「ごめんね……エラ。場所を移そう。匂いにヤドリマキが寄ってくる」

私に肩を貸すと、ゆっくりとアタは歩き出した。謝罪のつもりなのかその方向は街とは違っていた。

「本当にごめん」

「……いいの。私だつて、逃げてるだけ。そんなこと気づいてる」

「こんなこと言っても信じてもらえないかも知れど、僕も少しだけ君の気持ちはわかるんだ」

二人の歩調が、少しずつ合つてゆく。
「僕には弟がいたんだ。生まれた時にはもう亡く

なっていた弟が。生まれてすぐに亡くなった人にはまだ魂が宿ってないから、彼からヤドリマキが生まれることはなかった。でもみんな少しの可能性に期待したんだ。期待して、何日もヤドリマキが彼と僕らを繋いでくれるのを待っていた」

「その弟にちゃんと魂が宿っていて、ちゃんと葬儀ができるように？」

「うん。でもダメだった。苦しかったよ。家族のみんなが動かない弟をみながらじつとすすり泣き続ける。何日も。僕はそれが耐えられなくて、僕が弟を食べようと思った」

「！……それで、食べたの？」

「それもダメだった。神様がどうかでみんなが反対して、結局弟は外にいるヤドリマキに食べてもらうことになった。そのときだ」

アタが歩みを止めて、私の方に顔を傾けた。息がかかるほどの距離。彼の目にも言葉にも、深い悲しみの色がにじんでいた。

「僕はそのとき、やつとみんなの笑い合える日々が戻ってくるって思っていた。それなのに……弟の体がヤドリマキに食べられてるとき、怖くなったんだ。とても残酷で、巨大な、うまく言い表せないんだけれど……おぞましいことが起きているような気がして。僕はその場から逃げ出した。その日から僕はヤドリマキが食べられなくなった」

「でも、アタは」

「うん。僕も食事から逃げ回って、エラと同じように餓死しそうになった。まるで死んだ気分だった」

た。それで、向こうの高原の裏あたりで倒れてた僕のもとに、小さなヤドリマキが寄って来たんだ。僕を死んでると思ったんだらうね。小さな鉄で僕を食べようとした」

アタは目を落とすと自嘲ぎみに笑った。

「結局みんな、死ぬよりも生きることを選んだだけだった。僕はそいつを掴んで口元に運んだ。無意識だった。ぶつりと弾けるとあの泥と血の生臭い味が広がった。噛んでも噛んでも殺が割れなくて、吐き出した。そいつは死んでいた。僕はいろんなことに向けて、仕方ないなって思ってた」

私はアタの過去に驚いていた。自分だけがこの世界で唯一孤独だとまで思いがついていたから。嬉しいような、恥ずかしいような、不思議な気持ちだった。

「それで私にもヤドリマキを食べろって言いたいの？」

それを誤魔化すように返事すると、アタはまた困ったような顔を見せて微笑んだ。

「……それよりも先に、生きることを選んでほしいな、なんて」

「同じでしょ？」

「……さて！ こころ辺でいいかな。ここはヤドリマキはいなさそうだ」

私がからかっていることに気付いたのか、アタは肩を貸すのをやめ雑に話を切り替える。私はさっきまで胸にあった吐き気が治まっていることに気付いた。

仕方ない、その言葉が胸に響いている。少なく

とも私は、今死にたくはないのだと気付かされたから。

「私帰る」

「そっか。良かった」

驚くと思ったのに。アタの微笑みは私がどこまでも掌の上にいるようで煩わしかった。

「そういえば、おばさん怒ってた？」

「怒ってたし、心配してた。血のつながりがなくとも食べさせる義務がある。あの日からエラは私の本当の娘なんだから。って」

「そう」

悪い人ではないのだ。身寄りのない私を引き取ってくれた。私がこの世界の全てに耐えられないだけだ。

「おかあさんとは呼ばないの？」

「やだ」

私の故郷はまだあの部屋で、どれだけ慣れても箱を受け入れられた訳ではなかったから。

「私のお母さんは一人だけだから」

世界は部屋で、太陽はランプ。食べ物白い粘土のようなもの。母は動かなくなるまで私に一切の欺瞞を与えなかった。それなのに、ヤドリマキと出会ってからは全てが裏返って欺瞞に見える。母はどうして私を部屋に閉じ込めていたのか。あの食べ物は何だったのか。何故死んだのか。私には全てがわからない。

箱の文化を受け入れるたびに、記憶の中で微笑む母の顔が読めなくなっていく。

「お母さんは、何のために生きていたのかな

……」

何も分からないからこそ、とても抽象的な問いだけが浮かんできた。そこから疑問は分化する。外の世界のことを私に隠して何をしていたのか、そして何がでなくなったのか。

「わかりたいなら、エラ」

アタは私を真っ直ぐに見つめていた。

「それを生きる理由にすればいい」

その視線の先は遠く未来で生きている私を捉えている様だった。いつものくりくりとした目がとても鋭く細められ、深く差し込まれている。だが、アタはすぐにその表情を解いて恥ずかしそうにいつもの微笑みを浮かべた。

「エラはお母さんの話をする、すっごくいい笑顔になるんだ。だからそのお母さんが悪い人なはずがないと思う。きつと理由はあるから、不安にならないで」

この日は、私にとって忘れられない日の二つ目になるだろう。少しだけ世界を受け入れ、箱に生きる人間の一人になった日。ヤドリマキとそれに連なる文化を忌避しながらも、自分が虐待されていたのかも本当はわからず、悲観と懐古に暮れていた日々を、箱に生きる少年の言葉が救ってくれた。

しかしそれは結局のところある文脈と思考形式を継承したに過ぎず、箱への信頼が大きくなることは母への不信が大きくなることもある。

お母さん。もし、三年前のあの日あなたのヤドリマキを食べた私の中に宿ったのなら、今の私は

どんな風に映ってるの？

こんなことを考える私は、あの部屋の中にはいなかっただろうに。

△▽

ヤドリマキ。人間に寄生して、宿主の死後に孵化し腐肉を漁る生命。

そして私たち人間は、彼らを食べることで生き長らえる。

その行為が彼らの卵を体内に取り入れるものだったとしても。

あの日から十年の月日が経っていた。もう部屋の中で過ごしていた時間よりも箱の中で生きていた時間の方が長くなる。

箱はというと。特に変わった様子はなく、人々は草を溶かし、粘土をこね、ヤドリマキを捕らえて生きていた。騒がれた事と言えば、土を深く掘り過ぎて地面までたどり着いてしまったものが一人嚴重注意をくらったくらいだろうか。

そういうえば、箱の人口が千五百人を超えたと言う噂が流れたこともあった。このまま人が増え過ぎたら住む地面が足りなくなり、壁面や天面に家を構える時代が来るかもしれない、なんて話も流れたが、誰もが塔を思い出して口をつぐんだ。箱の外にも世界が広がっているなんて話も同様だ。神話という呪いはあまりにも根深かった。

私は母の過去を調べ続けていたが、結局のところ

る真意を理解できるほどの成果はなかった。

母は巫女だったのだが、そもそも巫女というものがあるのかも多くのものは知らなかった。母が死んでからは存命だった先代が巫女の役職に着き直した。しかしどうやら今は儀式の必要がない様で、話を聞きにいつてもあまり明瞭な解は得られなかった。

私の父にあたる人もすでに病死しており、手ばかりは得られなかった。

私は箱の生活に慣れ、結婚し、子供を授かった。今、私のお腹の中には新たな命があるのだ。ヤドリマキとは別の新たな命が。

母の真意が見つけれなくとも、母と同じ道を歩いている。そして、私は母と同じ選択をするのではない。その道をつ分かつ選択をするときに、母の真意が理解できるという直感があった。

私は草を火で溶かし、固める日課を行っていた。草は土と同様に食べられないが、増殖する資源となる。純粋な草を再び伸ばすことで、繊維を作り服を編むのだ。

扉が開く。いつにもなく忙しい様子で、夫が帰ってくる。

くりくりとした目の少年はたくましく成長し、今では村の誰よりも力の強い青年になっていた。

「ただいま。エラ！ 大変だ」

「アタ、そんなに焦ってどうしたの？」

「巫女様が亡くなった。次代の巫女に君を指名して。……こんな大事な時期だったのに！」

母の先代の巫女は、七十を超える老婆だった。老衰だ。おそらくこの世界で最も幸せな死に方だと大多数が思っている最期だと、誰もが本人の意思など知らずにそう言った。

葬儀には彼女の家族と後継者である私が出席していた。ヤドリマキが彼女の細い体を食べ終えるのを待つ間、私はそのイメージを思い浮かべない様に必死だった。

今回は人数が多いからか、彼女の体から出たヤドリマキは逃すことなく全部を全員で分けることになった。

葬儀屋がこの個体は心臓から生まれたのだ、骨を多く食べたから殻が大きいだの解説をしながら、奴らを目の前で解体する。私は失礼にならない程度に目を逸らした。

全員の器にヤドリマキが行き渡ると、ひとりまた一人とそれを口にする。誰もがごちない所作で手を動かすが、自分だけその理由が忌避感であることが申し訳ない。

食べ慣れたとはいえ、葬式で食べるヤドリマキは生だと決まっているから嫌でもあの日を思い出す。しかし、加熱しようがしまいが、ヤドリマキの卵には無関係だ。今更これを食べたところで、事実的に変わることなど何もなかった。

そう思いながら口へと運び、巫女の生前を少しでも思い出して気を紛らわせる。

『ヤドリマキがいるから、私たちはここまで増え栄えることができたのよ。恐れることはありません。彼らも私たちと変わらないただの命なのだから』

ら」

『儀式に特別な意味はないの。ただだからこそ、それを特別なものにしたときに、人はそれを儀式にしてしまうの』

『ランタは聡明で優しく、強い子だったわ。似てないって顔をしていますね。でもあなたもよく見ると考え方や感じ方がランタそっくりよ』

記憶が感傷をつれ、そしてそれが波となって、いつのまにか、私も彼らの輪を繋ぐ一部に変わっていた。

否定することが許されないほど、脆く、途方もなく、根深く。そして許せないほどにおぞましい。皆の器が空になり、誰もが静かな余韻のなかで、思い描く過去を見ていた。

そのとき、今を思い出させるように、胎が、動いた。

私はこの子がこの世界で生まれて、本当に幸せになるのか分からなかった。

葬儀が終わると、真っ先にアタが迎えに来た。

「ごめん。俺も一緒にいられば良かったんだが」「いい。何とか耐え切ったから。それに巫女様には色々お世話になったもの」

「子供のためにも、エラには無理してほしくない。俺の力不足だ」

この後は、儀式についての説明を受けることになっっている。なんでも、ここ数日あたりから巫女の儀式が復活していたようだ。

「この後なんだが、説明は全部受けてきた。俺が

儀式に同伴しながらエラに説明しようと思う」

「えっ。儀式の秘匿とかは大丈夫なの？」

「そこはアレだ。ちゃんと頑固な爺さんは説得しておいた。一對一なら、意外とどうにかなる」

「それ、私のことを言ってる？」

「めっそもない……とはいえ、先代が引き継ぎをする前に亡くなったうえ、最近まで必要もなかったせいで誰も大まかなこと以外は知らなかったようだ」

私が葬儀に出ている間、アタは自分にできる方法で私を助けてくれたようだ。

私はアタに自分から生まれたヤドリマキを食べしてほしいと思った。そしてアタのヤドリマキならば食べるのが苦でないような気がするのだ。

だが、そんな少しだけ恍惚とした感覚が浮かんだ後には自己嫌悪が腐臭を放ちながら背中を撫でる。その顔は母の亡骸の容貌をしている。私はまだ、どちらにも成れなかった。

そんな感覚に辟易としているとき、アタが思いがけぬことを言った。

「でもお義母さんのことで発見があった。エラを部屋で育てているときも外で巫女の仕事をしていたようだが、丁度お義母さんが亡くなった頃から、儀式が中断されていた」

「それって」

母が死んで儀式が中断されたのなら先代が継いですぐに再開されるはずだ。つまり、儀式が中断されたから母は死んだということが想像できる。

アタは私の顔色を見て、それ以上の説明がいら

ないことに気づいたようだった。

「儀式は塔からの供物を柱に奉還すること」

「つまりあの逆さ塔の下ね」

答えが、手の届くかもしれない近くへと。

塔までの道のりは平坦だが、草は私よりも背が高く、茂みに入ると自分がどこにいるのか分からなくなる。

ここには多くのヤドリマキが潜んでいる。そう思うと、私は少しだけ身震いをした。

アタは視野を遮る草を倒して天井を見ながら、塔の元へと私を導いている。

「待ってくれエラ。靴紐が解けてる。……ああ、しゃがみ辛いよな。俺が結ぶよ」

視野を緑の柱が大量に揺れる中で、アタはしっかりと周囲を見ていた。

「慣れてるのね。こういう場所」

「そりゃ毎日食料調達に入ってるやな。むしろエラくらいだ。慣れていないのは、よし」

移動しながら、アタはどんな場所に奴らがいるかを教えてくれた。きつと私が奴らを避けやすいようにそうしてくれたのだと思う。

それでも、草の揺れに目が慣れてしまうと、嫌でも何匹かは目に入ってくることになる。死んだ個体からまさに子が湧いているところ、喧嘩をしているところ、共食いしているところ。奴らの醜い生態を、嫌というほど拝むことになった。これが今後毎日続くのだと思うと気が滅入る。

どうしてこんな生き物に食われる未来を選んで

まで、私たちは生きながらえようとするのだろうか。

思考の澱みを塗り替えるように視野が開ける。

私たちは塔の下にたどり着いた。

ここには不自然なまでに草が生えていない。

何かおかしいものがないか見回すと、丁度中心部に、小さな箱が落ちていた。土の減り込み方を見るに塔から落ちてきたことが想像できる。

「これが供物？」

「多分……それを柱にある奈落に入れたら儀式は終わりだそうだ」

「それだけの？」

本当にそれだけで終わりなのだろうか。たったそれだけにどれほどの意味があるのだろうか。それを特別たらしめるには、もっと大きな意味があるのだ。そうでなければ、たったこれだけに母の命がかかっていたなどとは思えない。

「えっ！？ エラ何を」

箱には中身があるものだ。私はその封を壊した。まるで開くために作られていたように簡単にそれは壊れ、中に入っていたものをあらわにした。

「……ここに、あつたんだ」

全てが、つながった。

そこには、あの部屋の中でお母さんと二人分けたった白い粘土のような食べ物が入っていた。

お母さんはきつと、私と同じだった。

ヤドリマキは単体で増えることはない。同族を含めた他者に食われることで卵を寄生させて増えることができる。

私はこの十三年間で蓄えた知識を、一つ一つ組

み上げてゆく。

ヤドリマキの一生は、食われるか、自然死するか。自然死した個体は過去に同族を食べたことがあれば、そのときに寄生された卵が孵り、そしてそのときに生まれた個体は宿主を食べることで、その卵に寄生されるのだ。

人間から孵化したヤドリマキが自然死してもヤドリマキを発生させることはない。ヤドリマキの発生には、それを過去に摂食した経験が不可欠だ。そして人間の一生は、ヤドリマキを食べるか、食べないか。しかし、箱の中にヤドリマキ以外の食料はない。そう思われていた。

「あつたんだ。ヤドリマキ以外の食べ物。幻じゃなかったんだあの日々は。お母さんはきつと私をヤドリマキと無縁の人生を送れるように、部屋で育てていたんだ！」

では何故、箱はこれの存在を隠して捨てていたのだろうか。

「恐いからだよ」

私の表情を読んだアタが答える。

「人の数に合わない、一人二人だけヤドリマキから解放された生活ができるなんてそんな希望は、この箱の中では毒になるからだ。だから、誰もがヤドリマキを崇め、仕方ないものに塗り替えて、その希望を隠した。」

ヤドリマキがいるから、私たちはここまで増えることができたのよ。先代の言葉が頭の中に響いて渦を巻く。

「でも、その希望が毒になるのはもつと人間の数

が少ないときでしょ。最初はもっと少なかった、だから、誰かがヤドリマキを食べることを選んで、人類は数を増やすことに成功したの」

「そうか、その反動で俺たちは奴らに魂なんて高尚な枠組みを当てはめたのか。道を外れた罪悪感を隠すために。魂の正体はヤドリマキだと語ったあいつらの目の奥には、いつも怯えの色があった」

「もう私たちは止まらないのよ。私たちもヤドリマキも増えてしまった。今更一人二人の人間だけが生きる世界には戻れない」

増えるため死後に食われる契約を結び、それを全ての人に背負わせた。数が増えることでそれは重みを持ち、変えがたいものになる。しかしそれは全て人間の選んだ道だった。

不条理もただの摂理だ。誰もがその中で自分の正しいと思うことを行う。だが、流れに逆らうためにはそれ以外を知らなければいけなかった。

「お母さんはその中で、私を愛していたからこそこれを教えてくれたのよ！」

そして、塔からの供給が絶たれたことによって失敗に終わった。母が先に餓死したのは、私に全部くれていたからだ。母はきつと、長期的にヤドリマキを食べていなければ大丈夫ということに賭けていたのだろう。母には、私にとってのアタがいなかったから。

ずっと疑問だった。母が私を部屋に閉じ込めていた理由。どんな目的があって、私をどう思っていたのか。

母は私を愛していただけだったのだ。自分の

まっすぐな愛を私に与えるために、この方法を選んだ。

幸せになる方法は、愛すること、愛されること。あの部屋の中で生きた私も、箱を生きた私も幸せだったのだ。

私は胎に手を当てると、アタの顔を見る。アタは、私の目を見てそして頷いた。

「私たちは、あなたを愛してる」

今の私は母と同じ場所に立ち、母の歩いた足跡がよく見えていた。

コメント

この作品の構想は、電車酔いの最中、遺体からヤドリが這い出てくるイメージが脈絡なく湧いてきたところから始まりました。

はい。作中のヤドリマキは基本的に貝のないヤドリカリのイメージをしていただければ幸いです。主観の描写よりは可愛い奴らです。虫や甲殻類の比喩が使えなくてなかなか苦戦させられました。というか、この増え方はウィルスのですね……。

宿る命ということで色々やってみました。有限資源の閉鎖空間に無限資源が混入したインフレーションは、想像していて楽しかったです。賞味期限切れのパンドラの箱。

読んでくださった方も、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。もし作者も見出せていないなにかを見つけてくださったのなら、それ以上の幸せはありません。

あらゆるものが規模を拡大し複雑化した現代。無知は無理解を、そしてひいては不条理を生み出します。気付きを育ててゆくことは、我々を理不尽から救い出す鍵になると考えます。